

## 適正配置計画等に位置付けられた学校数の検証について －検証ポイント 学校と地域との関わりについて－

2020.1.31

### 1 はじめに

別添1の「宮代町の小中学校のあゆみ」のとおり、当町で最も古い須賀小学校と百間小学校は、明治6年（1873年）に創立されています。

昭和22年（1947年）4月には、学校教育法が施行され、3か年の新制中学校がスタートしました。そのとき、当町では、須賀中学校、百間中学校が開校しています。

その後、人口増加等に伴い、昭和33年4月に百間小学校の川島分校として設立した東小学校が、そして昭和56年4月には笠原小学校が開校し、小学校は4校となりました。同様に、中学校も昭和58年4月に前原中学校が開校し、3校となりました。

このように町立の小中学校は、それぞれがそれぞれの歴史を持ち、「地域」の中でその歴史を刻んできました。

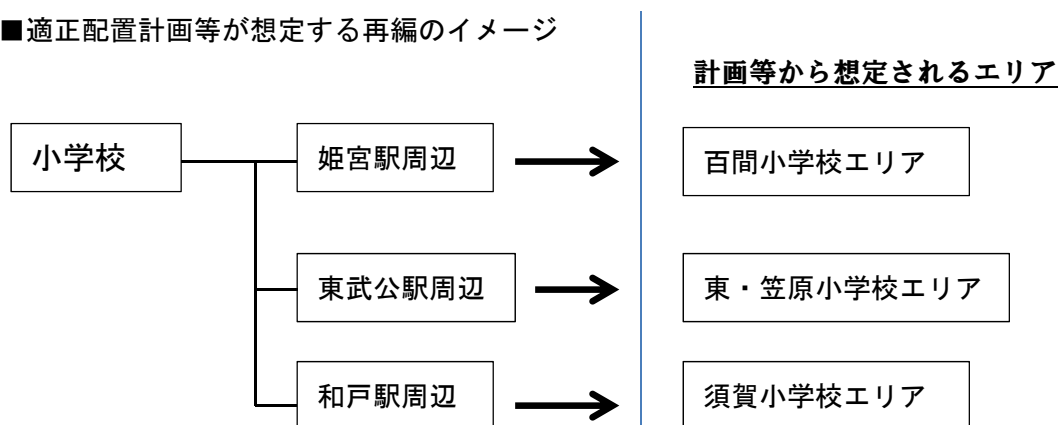
今回の審議会では、「学校と地域」を視点に、適正配置計画等の実行していくことで「学校と地域」との関わりにどのような影響を与えるのか、という点から検証していきます。

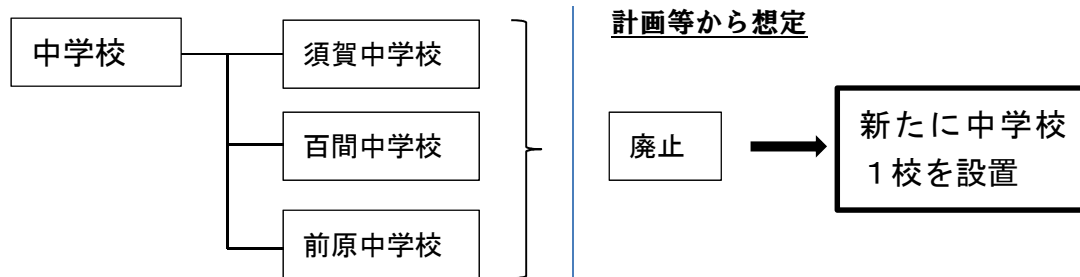
### 2 適正配置計画等による位置付け

小学校については、「東武鉄道の3駅周辺に市街地が広がっているという宮代町の地理的特性から、それぞれの市街地毎に小学校を配置」するとしており、今後3校に再編されても、これまでの「学校と地域」のつながりについては、大きな変化はないと考えられます。

他方、中学校については、3校を1校とする再編が計画されており、現在の「学校と地域」の関係性は、変化することが予想されます。計画が実行された場合、現在ある3校は全て廃止され、新たな場所（地域）に、新しい中学校が設置され、新たな歴史を刻んでいくこととなります。

#### ■適正配置計画等が想定する再編のイメージ





### 3 中学校と地域との関わり

地域と学校との関係性を検証していくために、中学校の歴史を改めて振り返ります。

昭和 22 年に須賀中学校と百間中学校の 2 校が設置されました。創立時の状況について、宮代町史（平成 14 年 3 月 31 日発行）は以下のように記述しています。

#### 宮代町史より

##### 百間中学校

旧青年学校校舎（現中央二丁目）を本校とし、百間小学校、川島分校（現東小学校）を分室として使用した。1 階が二教室（和室）、二階が一教室、簡易な玄関兼職員室等があった。－中略－

毎年村民運動会を行い、村民とともに和気あいあいと過ごしたという。

##### 須賀中学校

昭和二十二年四月一日、戦後の混乱の中で誰もが疲れきっていたさなか、新しい希望にもえて新学制実施により須賀村立須賀中学校が創立された。四月二十一日開校式が挙行された。翌年九月には、早くも校章が制定されている。同二十五年十月、小学校に隣接して新校舎が建設されその起工式が行われた。－中略－

昭和二十二年度には、生徒数、男一〇五人、女九一人、合計一九六人、翌年には二一九人、二十四年二三二人、そして校舎の完成した二十六年には二三一人であった。クラス数は記録に無いが、昭和二十年度は各学年二クラスと記録されている。

同時期に創立された須賀中学校と百間中学校は、宮代町史によると、それぞれの中学校が地域に根ざし、地域に育まれてきたという歴史を垣間見ることができます。

昭和 58 年度には、宮代町字中地区に前原中学校が設立されました。前原中学校は、百間中学校のマンモス化のため分離して設立されたものです。

昭和 57 年度当時の百間中の生徒数は、1129 人ものマンモス校になっていました。前原中学校の開校時の生徒数は 558 人となり、それに伴い百間中の生徒数も減少しました。（昭和 59 年度の生徒数は、674 人）

前原中学校は、比較的新しい学校であるため、現時点では、宮代町史における記述はありません。

#### 4 現状における地域との関わり

今般の審議会での検討に当たって、現状における「学校と地域」との関わりについて各中学校において調査しました。

調査結果は、**別添2**のとおりです。

#### 5 適正配置計画等におけるイメージ

歴史的にも、そして現在も、学校は、地域にとっては、誇りであり、愛着のある場所であるということは間違いのないところです。

ただ、考えていかなければならないことは、将来的に、子供たちが減少していくとの状況が明確な中、本審議会では、今後の学校のあり方として、

- ① 現状を保つこと。すなわち地域に存在する「学校」を引き続き重視していくのか
  - ② 一定の学校規模を確保し、子供たちの切磋琢磨の機会、部活動の充実、必要な教職員の配置など、子供たちの学びの場であるという教育環境の維持発展を重視するののか
- という点から検証していくことが必要となっています。

現在の適正配置計画等が目指す学校と地域との関係性のイメージは、**別添3**のとおりです。

これを整理すると、

- 小学校の施設更新を実施する際には、地域拠点施設や福祉施設等も併設し、学校と地域社会の接点を物理的に配置し、地域と学校の結びつきをより強固にする構想がある。
- 小学生は地域と常に接点を持ち、地域全体で育まれるとともに、学校を中心に地域コミュニティの活発化を推進する構想がある。
- 他方、中学校は、町内の子供たちの新しい出会いの場として、そして充実した教職員の確保を通じて、部活動も含めた教育環境の充実を構想している。

すなわち、小学校においては、現状以上に地域の中にある学校という位置付けを明確化し、学校と地域との関連性を、小学校でより強固に、そして太くすることを志向している計画といえます。

中学校は、地域とのつながりも重視しつつも、町内の「全ての子供たちが集う学校」というスケールメリットを生かして「出会う」、「競い合う」、「協働する」など、子供たちの成長に合わせた社会性の育成のほか、教職員の確保充実による学校教育及び部活動の充実強化を図ることで、将来を担う人材の育成と学校環境の整備を目指す計画であるといえます。そして、現行計画等においては、中学校でにおいて「宮代の子供たち全員が同窓生」になります。

これを、子供たちの成長の流れに沿って考えていくと、源流となる出生、幼児教育、小学校へと進み、中学校で全て町内の子供たちの成長の流れが一度合流します。そしてその先は、それぞれの進路へと進みながら、最終的には、自らが選択した「社会」という大海に向かうイメージに似ているかもしれません。

## 6 検証の視点

以上のように、地域に存在する学校は、その歴史と同じ時間、地域と共に歩みを続けてきました。

その間の卒業生、そして教職員、保護者など、直接関わってきた関係者の数だけ思いが積み上げられて、今の学校が地域の中に存在しています。

学校の適正配置、再編は、児童生徒の減少や学校施設の老朽化対策という行政的な課題への対応の側面から検討が求められていますが、地域にとっては、「学校がある」という日常の風景の変化であり、学校の適正配置と地域との関係性から、本計画の検証が必要です。

そこで、本日は、次の観点から議論をお願いします。

### **視点1**

**現在の地域と中学校の関係性についてどう考えるか。どう評価するか。**

### **視点2**

**将来的に子どもたちが減少し、中学校が小規模化していく中で、引き続き中学校を存続させる地域、生徒、保護者、学校にとっての意義をそれぞれどう考えればよいか。**

### **視点3**

**上記の2つの視点を踏まえたうえで、将来の適正配置を考えるに当たって、地域と中学校との関係について、どの程度考慮していくべきなのか。**